

A先生の努力にもかかわらず、落ち着きのなさは相変わらずでした。しかもA先生が熱心にかかわればかわるほど、一郎はA先生を避けるようになり、陰では友達をいじめるようにもなったのです。

このままでは更に悪化すると考えたA先生は、自分の抱えている心配を校長先生に話し、専門機関へ相談することについての指導を仰ぎました。校長先生は、「子供の将来のことを考え、学校側の押しつけにならないように注意して、両親とよく相談をしてみなさい。」と話してくれました。

さっそく、A先生は両親と会い、今までの指導の経過と今抱えている心配を素直に話し、「これから一郎君を指導していく上で大切なことです。何でもなければそれでいいし、私の心配するようなものであれば早いに越したことはありません。私も一緒に参りますのでいかがでしょうか。」と熱心に説いたのです。初めは驚いた両親も、日ごろ信頼を寄せているA先生の熱意に動かされ、専門機関での相談を承知したのでした。

相談の結果は、ADD（注意欠陥障害）の疑いがあるとのことで、専門医に診てもらおうようにと勧められたのです。

専門医においても、ADDという診断であり、以下のような説明をして下さいました。

《ADDの基本的特徴》

- ・ 知的には正常範囲にあり、軽い場合には脳波に異常はみられないことが多い。

- ・ 落ち着きがない。注意の集中が持続しない。情緒不安定。衝動的行動が目立つ。
- ・ しばしば行動障害、学習障害、運動障害、認知障害を伴う。

A先生は、このことがあってからは、以前のような気負いがなくなり、一郎をじっくり見れるようになってきました。

また、「一郎の行動は、本人が無意識のうちにしてしまっている。」との理解をふまえ、指導の基本についての助言を受け、専門医との連携・協力のもとに、次のようなことに留意しながら指導援助を進めていったのです。

- ・ 一郎は、月一回の専門医の診察を受ける。
- ・ 年齢とともに発達する可能性を信じる。
- ・ 感情的にしからず、わかるまで繰り返し具体的に教える。
- ・ 比較的集中させやすい、個別指導が効果的なので、授業や生活場面では、可能なかぎり取り入れる。
- ・ できたこと、努力したことを認め、ほめる機会を多くし、劣等感、孤立感、疎外感を持たせない。
- ・ 学年会で一郎についての共通理解を図り、同一歩調で指導に当たる。

このように、学校—家庭—専門機関の連携による指導の結果、一郎とA先生の関係は良くなり、表情もぐっと明るくなってきました。友達をいじめるようなこともなくなり、人の話に耳を傾けることも、以前よりはずっと多くなってきました。

— A先生が一郎君の指導に成功した要因 —

- ① 精神医学の基礎知識を活用し、資料の収集に当たった。
- ② 専門機関の相談を受けるよう両親を説得できた。
- ③ 専門医の診断により根源をきちんと把握できた。
- ④ 基本的な対応を知り、早期に症状に合った対応ができた。
- ⑤ 学年での共通理解を図った。
- ⑥ 専門機関との連携の必要性を判断し、その助言のもとに指導を進めた。